

No. 1477

21世紀への友好

— 中曽根首相、訪中 —

21世紀へ向けた日中友好の基礎固めを目的として、3月23日、中曽根首相は中国を公式訪問。北京の人民大会堂東門での歓迎式に臨んだあと、趙紫陽首相と日中首脳会談を行いました。趙首相と中曽根首相の会談は初めての事。このあと開かれた歓迎の宴では、人民解放軍軍楽隊が日本の「八木節」や「浜辺の歌」を演奏、宴会場は日本ムード一色に包まれました。翌24日、一行は天安門広場の人民英雄記念碑を訪れ、花束をささげました。行く先々で大歓迎を受ける中曽根首相。北京大学では、「21世紀をめざして」と題する記念講演を行いました。この中で首相は、日中協力関係を後世に引き継いでいく任務は、青年、学生の双肩にかかっている、と述べ、両国青年交流の重要性を訴えました。北京市内の中南海で胡耀邦共産党総書記と会談、さらに中国政府、党首脳との会談をしめくくるものとして、鄧小平中国共産党中央顧問委主任と会談、日中間の友好信頼関係を再確認しました。

絵を描く子供たち

神奈川県南足柄市に住む宮崎たか子さん（35才）。近所の子供たちに絵を教えるようになって、今年で3年になる。絵の世界と全く関係のなかった宮崎さんが、絵とかかわるようになったのは偶然のきっかけ、一冊の本との出会いだった。『お絵かき』この本の著者で、創造表現研究会の会長でもある高杉イサオさんは「子供の自由で独創的な考えを十二分に表現させる機会をたくさん与えて創造的意欲を高めてやるのが大切。」高杉さんの考え方に共鳴した宮崎さんは、以後高杉研究会の会員となり、高杉さんの指導を受けた。そして、今では立派な指導者の一人として、子供たちに絵を教える立場にある。しかし、一口に「子供の絵の創造教育」といっても、一人一人性格も能力もちがう子供たちに絵を教えていくことは難しい。何度も壁につき当たった。そんな時は、きまって「子供の絵の本当の先生はお母さんなのです」という高杉先生の言葉をおもい出す。絵を描くことは心の中にたくさんの世界を創っていくことだ、そう信じながら今日も子供たちと一緒に絵を描いている。